

オランダ船の輸入更紗
— 文化財学科新収史料「更紗裂」の紹介を中心として —

石田 千尋

「鶴見大学紀要」第53号 第4部

人文・社会・自然科学編（平成28年3月）別刷

オランダ船の輸入更紗 —文化財学科新収史料「更紗裂」の紹介を中心として—

石田 千尋

はじめに

平成27年1月14日、大谷美智子氏より鶴見大学文学部文化財学科に「更紗裂」432枚が寄贈された。この「更紗裂」はオランダ船が近世後期に日本に輸入した更紗の裂(端切れ)と考えられ、インド産の更紗裂とヨーロッパ産の更紗裂からなっている。本稿においては、まず、近世、特に19世紀前半におけるオランダ船の更紗輸入について概観し、その後、今回寄贈された「更紗裂」(以下、本稿では寄贈「更紗裂」と表記する)が何故このような裂の形になっているのか、また、どのような経緯で現在のような端切れの塊として存在しているのかを考察し、さらに寄贈「更紗裂」の特色とともに史料的价值について言及してみたい。

第1章 近世における更紗輸入

異国的な花鳥・人物・幾何学文様等、種々さまざまな模様を色鮮やかに主として木綿布に染めたものを、今日、我々は更紗と呼んでいる。更紗が何時、誰によって日本に持ち渡られたかは決め難いが、16世紀後半には、ポルトガル・スペインもしくは琉球・中国等の船で輸入されていたと推測される。16世紀から17世紀にかけてヨーロッパからポルトガル・スペイン・オランダ・イギリスが相次いで日本に来航し、その舶載品の中に異国情緒豊かな更紗が含まれていたことは容易に推測されよう。⁽¹⁾

日本に輸入された更紗はさまざまなものに使用された。近世初期には、陣羽織や小袖、帯、茶道具、祇園祭の装飾品などに珍重された。しかし、中後期になると、風呂敷や煙草入れなどの袋物や下着や襦袢・着物の裏など実用的な方面にも用いられた。『守貞漫稿』に「文政天保の頃来舶の華印布俗に廣更紗と云物價廉也、故に三都ともに男女晴服略服の時の下着に専之し」⁽²⁾とあるように文政・天保期頃になると更紗も廉価なものとして一般にも用いられていたようである。

更紗の到来は近世の友禅染をはじめとする日本の模様染の発達に多大な影響を与えた。また、日本において更紗そのものの模倣もおこなわれ、今日よく知られている鍋島更紗をはじめとして、京更紗、堺更紗・長

崎更紗等、インド更紗の模造といえる和更紗が製作された。

いわゆる鎖国体制下において、海外に対して公に開かれていた唯一の国際貿易都市長崎では、オランダ船・中国船を通して更紗が輸入されていた。オランダ船の輸入に限定してみた場合、17世紀～18世紀末に持ち渡られた更紗はインド更紗であり、19世紀にはいつからでもベンガル・コロマンデル・グジャラートの更紗が持ち渡られた。(図1参照)この内、ベンガル産の更紗が最も多く、主なものはchitzen Patnaschであった。そのほか、文化元年(1804)・文化2年(1805)にchitzen Cassembazaarscheが、文化4年(1807)・文政3年(1820)～文政12年(1829)にはMirsaporische chitzenが輸入されている。オランダ側の商品名にみられるchitzは「更紗」の意である。そもそもchitz(-en)は「染めわけた」という意の梵語citrāに由来するとされ、綿布を種々の模様染に染めわけたもので、浸染によるものと捺染によるものがある。Patnaschは「パトナの」の意。パトナはベンガルに隣接するビハール州の首都であり、この地で仕入れた更紗である。この更紗を日本側では「式番皿紗」と訳している。Cassembazaarscheは「カシムバザールの」の意。カシムバザールはベンガル、ムルシダバードの隣接地区で、この地で仕入れた更紗を日本側では「壺番皿紗」と訳している。品質的にこのカシムバザール仕入れの更紗がパトナ仕入れ品に比べて



図1 17～19世紀のインド

良質であったことが日本側の訳より推測できる。Mirsaporischeはインド北東の「ミルザプールMirzapurの」の意味であり、ミルザプールで仕入れた更紗。日本側はこの更紗を文政3年(1820)、文政4年(1821)に「弁柄皿紗」と訳しているが、文政8年(1825)には「メリサポリス皿紗」、文政10年(1827)には「メリサホノリス」と原語をそのままあてている。また、この更紗は帳簿上、インド更紗としてchitzen Patnasche「式番皿紗」と同じ扱いとして処理されることが多い。

輸入反物を鑑定・評価した反物目利によって作成された「反物切本帳」(次章で詳述)をみると、「式番皿紗」は決して上質の更紗ではなく、粗い木綿地にインド西特有の濃い赤と黒で小花や幾何学文様を染めたものである。こうした茜と黒の二色の更紗は今日でも量産を目的としたインド更紗にしばしば見られる。インド更紗の場合、藍は浸染をたてまえとしており、藍染を施すということは藍に染める以外の部分をすべて蠟で覆うという厄介な工程が必要とされる。そのために早く簡単に製作されるものとしてこの藍染を省略したこのような更紗がつくられるのである。

このほか、ベンガル産には、「ふとん皿紗sprijen Bengaalsche (ベンガルのベッド・カバー)」(文化14年(1817))、「大形皿紗Patnasche meubel chitzen (パトナの家具用更紗)」(文政7年(1824))などが輸入されている。

コロマンデル産の更紗はベンガル産に比べて量的には少なく、chitzen vergulde, chitzen Custなどである。verguldeは「金をかぶせた」という意であり、「金さらさ」「金入さらさ」と訳されている。CustはCoromandel Custコロマンデル沿岸、すなわちインド亜大陸東岸の中ほどにある都市マスリパタムあたりから南端近くのカリメレ岬あたりまでの沿岸地帯のことである。このほかにコロマンデル産には「マタラス皿紗Madrassse sprijen Indish (マドラスのベッド・カバー)」(文政7年(1824))の輸入がある。

グジャラート産の更紗は、1800年代初頭に集中しており、sprijen of palemposen Sourats, sprijen Amadabatse Sourats, chitzen Amadabatse, chitzen Souratsなどが輸入されている。この内、sprijen of palemposen Souratsのsprij(-en)とは「ベッド・カバー」の意である。ofは「すなわち」の意。Souratはインド亜大陸の北西のカンバイ湾に注ぐタブチ川の河口近くに位置する著名な商業都市スラトのこと。palempoos(-posen)はパランポア(ペルシア語のpalangposhから派生したといわれ、ベッド・カバーを意味する)のことである。すなわち、スラトで仕入れた本来ベッド・カバー用の更紗が持ち渡られたわけである。享和元年(1801)の日本側訳は「巾廣皿紗」であるが、後年の訳例では「蒲團皿紗」となっ

ている。また、chitzen AmadabatseのAmadabatseはインド亜大陸の北西部、グジャラート州最大の都市である「アーマダバードAmadabadの」の意である。享和3年(1803)に「アマタハス皿紗」、翌文化元年(1804)には「蒲團皿紗」と訳されている。

しかし、これら17世紀からインド産の代表的な商品であったインド更紗は、文政12年(1829)で輸入が途絶え、オランダ船の更紗輸入はそれと前後してヨーロッパ産の時代を迎える。ヨーロッパ更紗は文化10年(1813)より輸入されており、⁽³⁾ 文政期(1818~1830)には次第にインド更紗より量的に増え、文政13年(1830)以降完全にインド更紗に取って代わる。

ヨーロッパ更紗の代表的なものとしてEuropische chitzenがあるが、これは「本国皿紗」と訳されヨーロッパ独自の意匠によって、アリザリレッドやクロムイエローのようなあざやかな色彩を用いた花柄や幾何学文様等のプリント更紗である。また、このほかに、意匠においてインド更紗の模倣としてPatnasche chitzen in Europa nagmaakt(ヨーロッパで模造されたパトナの更紗)などが挙げられる。これは、先にみたパトナ更紗の模造品であり、藍抜きの色更紗をわざわざ真似て上質の木綿にプリントされた二色更紗である。この更紗は、文政4年(1821)にはじめて輸入され、「本国新皿紗」と訳された。その後、「本国式番皿紗」・「本国皿紗」・「弁柄皿紗」・「尺長皿紗」・「皿紗」などと訳されている。Europische chitzenに比べて非常に安く、先にみたインド更紗に近い価格で取引されており、量的にヨーロッパ更紗の半分以上がこの模造パトナ更紗であった。

先に述べたように、文政期(1818~1830)には、これらヨーロッパ更紗がインド更紗に比べて次第に多く輸入されてくるが、この頃、オランダでは更紗が盛んに生産されていた。オランダ北部のハールレム・ライデン・アムステルダム・クラリンヘンなどにはプリント・染色企業があり、特にアムステルダム近郊のオーフェルツームでは日本向けのベンガル更紗・パトナ更紗の模造プリントが手作業で製造されていた。また、オランダ南部ヘント(現ベルギー領)の近代的工場でも模造更紗がつくれ、⁽⁴⁾ 1825年に同地のスメット商会が産業展覧会でインドネシアと日本市場向けのプリント更紗を展示したりしている。⁽⁵⁾

では、なぜヨーロッパ、オランダにおいて、模造パトナ更紗など更紗の模造がつくれ、低価格で持ち渡られなければならなかったのだろうか。インドで製造された更紗に対する憧れのあらわれということも推測されるが、オランダにとってはそればかりではなく、政治・経済的に差し迫った理由が存在していたと考えられる。

18世紀中葉（1757年プラッシーの戦い）から19世紀中葉（1857年セポイの乱）にかけてのイギリス東インド会社のインド支配によって、オランダはその市場をイギリスに奪われ、物資を獲得することが困難な状況にあった。一方、イギリスはインドでの貿易収入と租税収入を本国へ移動し、その投資によって産業革命を推進させる一要素となっていた。イギリスではこの産業革命の技術革新によって紡績技術が飛躍的に進歩し、綿業が発達していた。19世紀前半にこのイギリス綿業は世界市場へと進出し、インドにおける都市工業の上質綿布は直接打撃を受けて没落していった。その結果、インドにおける綿布の生産は地方の諸都市や村落での粗布の手織りとなり、必然的に品質の悪化を生じてしまったのである。⁶⁾ 現存する「反物切本帳」に貼り込まれているインド更紗の粗末な織りと染めはそれを語っている。このような状況下で、オランダは輸出品となる更紗を自国生産、もしくはヨーロッパ通商圏内での購入に切り替えていったのであろう。このように、更紗の模造が生まれる理由として、イギリスのインド支配を起点とする一連の現象を考察することができる。そして、日本の文政期には先に述べたように、オランダ船の更紗輸入はインド更紗からヨーロッパ更紗へと転換していった。

第2章 寄贈「更紗裂」について

オランダ船が長崎に持ち渡った積荷物は各種の手続きを経た後、日本側の役人である目利によって鑑定・評価され、国内市場にもたらされた。輸入反物に関しては、反物目利とよばれる役人によってその職務が果たされた。この反物目利および取引にかかわった五ヶ所商人等によって輸入反物の裂を貼り込んで作成された「反物切本帳」（以下、「切本帳」と略称する）と称する史料が作成されている。この「切本帳」は現在、東京国立博物館をはじめ、長崎歴史文化博物館・長崎市教育委員会・九州国立博物館・九州大学九州文化史研究所・神戸市立博物館・関西大学図書館・杏雨書屋・京都工芸繊維大学美術工芸資料館・鶴見大学図書館・鶴見大学文学部文化財学科・東京大学史料編纂所・国立歴史民俗博物館等に所蔵されており、このほか、個人蔵を含めて各所に散在していると考えられる。反物目利によって作成された「切本帳」は、輸入反物の荷改めの際に、後の覚えとして作成されたものであり、それは、まず、「直組」すなわち価格評価のためであり、そのほか、大改下調べ、商人見せ、荷渡し等の際に現物と照合するためのものであったと考えられる。また、「切本帳」の中には、裂の剥ぎ取られた部分に「注文帳之節取之」と記されているものがあり、注文見本としても「切本帳」の裂が使用されたことがわかる。さらに、

「切本帳」はその残存形態からして、後年の参考として作成・保管する意味合いもあったと推測される。⁷⁾

反物目利作成の「切本帳」には、縦帳と横帳のものがあるが、両者とも見本裂が貼られた右上に反物名が墨書されており、品名と現物を確認することができる。また、貼付されている裂は横帳に比べて縦帳の方が全体的に寸法が大きいものとなっている。（図2・3参照）

今回の寄贈「更紗裂」432枚は、裂（端切れ）だけのもの297枚と一紙に数枚宛貼付された裂135枚とからなっている。実は、筆者は平成22年4月26日に今回の寄贈「更紗裂」を東京の某古書店にて、ご店主の御好意により調査させて頂いたことがある。その際、オランダ船持ち渡りの更紗裂が貼付された縦帳の「切本帳」15冊と寄贈「更紗裂」を拝見し、寄贈「更紗裂」が各裂の大きさと形状からみて、本来反物目利作成の縦帳の「切本帳」に貼付されていたものであったことを確信した覚えがある。また、一紙に数枚宛貼付された裂の一群は縦帳袋綴装の冊子体（「切本帳」）であったものが解体され、一紙の状態になったものと考えられた。その後、上記「切本帳」類の行方について情報が得られなかったが、近年、「切本帳」15冊の内13冊が九州国立博物館に所蔵されていることがわかった。（残り2冊については現在も未詳である）そのため、九州国立博物館に連絡を取り、平成26年8月21日に13冊全てを調査させて頂いた。

13冊の史料名は以下のようである。

- 「寛政五年 丑紅毛持渡切本 式冊之内」
- 「文化十四丑歳 紅毛方糸織類 三冊之内」
- 「文政元寅歳 紅毛方皿紗切本 式冊之内」
- 「文政三年 辰紅毛持渡端物切本 式冊之内」
- 「文政六癸年 未六番割 未紅毛式艘持渡糸織類切本 三冊之内」
- 「文政六癸年 未六番割 未紅毛式艘持渡糸織類切本 三冊之内」
- 「文政七申歳 紅毛方糸織類切本 三冊之内」
- 「文政十年 亥紅毛糸織切本 三冊之内」
- 「文政十一年 子紅毛切本帳 式冊之内」
- 「文政十二年 丑紅毛糸織切本 三冊之内」
- 「〔表紙欠〕」
- 「〔表紙欠〕」
- 「〔表紙欠〕」

表紙が欠けている3冊を除いて、寛政5年（1793）から文政12年（1829）までの史料群であることがわかる。（以下、九州国立博物館所蔵の「切本帳」を「九博本」と略称する）⁸⁾

平成22年4月26日に某古書店にて拝見した時は、今回の寄贈「更紗裂」の端切れは「集品堂」と印刷された茶封筒に入っていた。集品堂は昭和5年に『阿蘭陀更紗

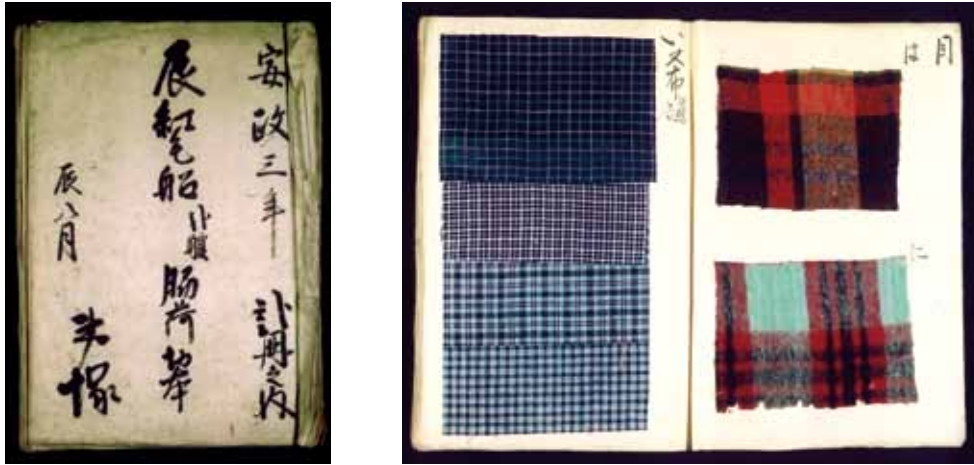


図2-1, 2 縦帳「安政三年 辰紅毛船式艘脇荷切本」(鶴見大学図書館所蔵)



図3-1, 2 横帳「〔安政三年〕辰紅毛船脇荷端物切本帳」(東京大学史料編纂所所蔵)

木版画全集』⁹⁾を出版している。『阿蘭陀更紗木版画全集』(以下、『木版画』と略称する)は、そのはしがきを信ずれば「寛政、享和、文化、文政、天保の五時代に渡りて真に貴重せられし阿蘭陀更紗三千種の中から」120枚を選んで木版画にしたものである。¹⁰⁾しがたって、上記の「切本帳」15冊と寄贈「更紗裂」が『木版画』の材料であったのではないかと考えられた。そこで、今回、大谷氏よりの寄贈を機に寄贈「更紗裂」と共に「九博本」を加えて『木版画』と照合することにした。

照合の結果、合計で55枚が一致、またはほぼ一致することがわかった。(この内、寄贈「更紗裂」19枚、「九博本」36枚。本稿では寄贈「更紗裂」と『木版画』の照合結果を図4にまとめて掲げた。)このことから、筆者が某古書店で拝見した史料群が『木版画』作成のための材料であったことはまず間違いないであろう。しかし、今回の照合によって、『木版画』の全図120枚全てにわたって一致解明できないことより、まだほかに『木版画』作成にあたっての材料(史料)が存在していたと考えられる。すなわち、寄贈「更紗裂」と「九博本」は『木版画』作成材料の全てではなく一部というわけである。

第3章 寄贈「更紗裂」の特色と輸入年

寄贈「更紗裂」432枚は、前述のようにインド産の更紗裂とヨーロッパ産の更紗裂からなる。事例として数点挙げれば次のようである。

図5・6は、インド更紗と考えられる。第1章で述べたように上質の更紗ではなく、粗い木綿地にインド西特有の濃い赤と黒で、小花や幾何学文様を染めたものである。

図7・8は、ヨーロッパ更紗と考えられる。インド更紗と異なり、ヨーロッパ独自の意匠によってアリザリレッドやクロムイエローのようなあざやかな色彩を用いた花柄や幾何学文様のプリント更紗である。









図9・10は、ヨーロッパにおいて製造されたインド更紗の模造品と考えられる。藍抜きの二色更紗をわざわざ真似て上質の木綿にプリントされた二色更紗である。図10の方は、オランダ側史料にnagemaakte Bengaalse chitzen(模造ベンガル更紗)と記され、日本側で「弁柄更紗」と訳されるものであり、褪紫色を基調として黄色を添えた更紗である。







寄贈「更紗裂」は、冊子体が解体されていることや、冊子から剥がされているため、すべてにわたって輸入年を確定することは難しいが、現在各所に所蔵されて

図4 寄贈「更紗裂」と『木版画』との照合

寄贈「更紗裂」	『木版画』	寄贈「更紗裂」	『木版画』
 <p>(1)</p>	 <p>〈8左〉</p>	 <p>(8)</p>	 <p>〈46左〉</p>
 <p>(3)</p>	 <p>〈11右〉</p>	 <p>(10)</p>	 <p>〈59左〉</p>
 <p>(6)</p>	 <p>〈22右〉</p>	 <p>(12)</p>	 <p>〈69左〉</p>
 <p>(7)</p>	 <p>〈43左〉</p>	 <p>(322)</p>	 <p>〈22左〉</p>

寄贈「更紗裂」	『木版画』
 <p data-bbox="395 663 443 696">(62)</p>	 <p data-bbox="683 663 754 696">〈35右〉</p>
 <p data-bbox="384 1102 443 1135">(104)</p>	 <p data-bbox="683 1102 754 1135">〈31左〉</p>
 <p data-bbox="384 1541 443 1574">(105)</p>	 <p data-bbox="683 1541 754 1574">〈32左〉</p>
 <p data-bbox="384 1977 443 2011">(106)</p>	 <p data-bbox="683 1977 754 2011">〈52右〉</p>

寄贈「更紗裂」	『木版画』
 <p data-bbox="1042 663 1101 696">(107)</p>	 <p data-bbox="1366 663 1425 696">〈54〉</p>
 <p data-bbox="1042 1102 1101 1135">(108)</p>	 <p data-bbox="1366 1102 1425 1135">〈65〉</p>
 <p data-bbox="1042 1541 1101 1574">(147)</p>	 <p data-bbox="1342 1541 1417 1574">〈24左〉</p>
 <p data-bbox="1042 1977 1101 2011">(148)</p>	 <p data-bbox="1342 1977 1417 2011">〈51左〉</p>

寄贈「更紗裂」	『木版画』
 <p data-bbox="384 663 443 696">(149)</p>	 <p data-bbox="683 663 754 696">〈53左〉</p>
 <p data-bbox="384 1102 443 1135">(150)</p>	 <p data-bbox="683 1102 754 1135">〈61左〉</p>
 <p data-bbox="384 1541 443 1574">(222)</p>	 <p data-bbox="707 1541 754 1574">〈58〉</p>

註：() 内は寄贈「更紗裂」の整理番号。

〈 〉 内は『木版画』の各木版画シート番号。

いる「切本帳」と照合することにより何枚かは輸入年を推測することができる。例えば、図11は鶴見大学図書館所蔵の「〔天保三年 辰紅毛船持渡端物切本帳〕」内の「尺長上皿紗」(ヨーロッパ更紗)(図12・13参照)と一致し、天保3年に輸入されたものと推測できる。⁽¹¹⁾ また、同じく鶴見大学図書館所蔵の「御用御詵切本」内に貼付されている天保5年の「弁柄更紗」(ヨーロッパ製インド更紗の模造品)と一致する裂もみつけることができる。(図14~22参照)

しかし、同一の更紗が多年度にわたって輸入されることも一方で確認しておかなければならない。また、輸入更紗は19世紀に入ってから年によって数千反から一万反以上輸入されている年があるため「切本帳」に貼付されている更紗裂がその年の輸入更紗の全てではないこともあわせて確認しておかなければならない。

今回は、寄贈「更紗裂」と、東京国立博物館所蔵の「切本帳」のうち輸入年の明確なオランダ船持ち渡りの反物裂を貼った19冊との照合をおこなうとした。⁽¹²⁾ その結果、図23にみらるるように108枚の輸入年を推測することができ、寄贈「更紗裂」が近世後期に輸入された更紗裂であることをあらためて確認できる。

おわりに

今回は、寄贈「更紗裂」について意匠を中心とした照合ならびに考察をおこなったが、今後も現存する「切本帳」との照合とともに、繊維や染料等の調査研究をあわせておこない、原産地等の確定も試みていきたいと考えている。

確実な輸入年は決めがたいものが含まれているが、寄贈「更紗裂」は近世後期にオランダ船によって日本に輸入された更紗の裂であり、その史料的価値は非常に高いといえる。今後、文化財学科の貴重な収蔵史料として大切に保存・管理していくものである。

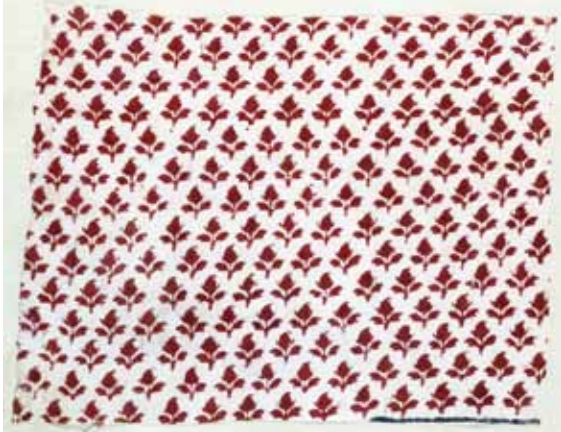


図5 インド更紗 (299)



図6 インド更紗 (305)



図7 ヨーロッパ更紗 (145)



図8 ヨーロッパ更紗 (130)



図9 ヨーロッパ製インド更紗の模造品 (394)



図10 ヨーロッパ製インド更紗の模造品
(弁柄更紗) (286)

註：() 内は寄贈「更紗裂」の整理番号



図 11 ヨーロッパ更紗 (62)



図 12 尺長上皿紗



図 13 「〔天保三年 辰紅毛船持渡端物切本帳〕」(鶴見大学図書館所蔵)



図 14 (292)



図 15 弁柄更紗 (天保 5 年)



図 16 (431)



図 17 弁柄更紗 (天保 5 年)



図 18 (404)



図 19 弁柄更紗 (天保 5 年)



図 20 「御用御誂切本」
(鶴見大学図書館所蔵)



図 21 (285)



図 22 弁柄更紗 (天保 5 年)

註：図14・16・18・21はヨーロッパ製インド更紗の模造品（弁柄更紗）
（ ）内は寄贈「更紗裂」の整理番号

図 23 寄贈「更紗裂」の輸入年

註：() 内は寄贈「更紗裂」の整理番号

寄贈「更紗裂」	輸入年	寄贈「更紗裂」	輸入年	寄贈「更紗裂」	輸入年
	文政9 文政12		文政7 文政9		文政3
(3)		(8)		(16)	
	文政3		文政12		文政5 文政7
(4)		(9)		(17)	
	文政12		文政3 文政5		文政4
(6)		(13)		(18)	
	文化2		文政4		文政3
(7)		(15)		(20)	

寄贈「更紗裂」	輸入年	寄贈「更紗裂」	輸入年	寄贈「更紗裂」	輸入年
	文政3 文政4		文政2		文政9 文政12
(24)		(35)		(49)	
	文政5		文政6		文政2 文政12
(25)		(41)		(51)	
	文政12		文政5 文政9 文政12		文政4 文政5
(32)		(43)		(54)	
	文政2 文政3		文政4		文政4 文政5
(33)		(46)		(55)	

寄贈「更紗裂」	輸入年	寄贈「更紗裂」	輸入年	寄贈「更紗裂」	輸入年
	文政4		文政9 文政12		文政2
(304)		(322)		(342)	
	文政6		文政2		文政12 天保3
(310)		(324)		(62)	
	文化11		文政2		文政4 文政7 文政9
(311)		(326)		(66)	
	文化11		文政2 文政7		文政13 天保2
(312)		(337)		(69)	

寄贈「更紗裂」	輸入年	寄贈「更紗裂」	輸入年	寄贈「更紗裂」	輸入年
	文政6 文政13		文政7		文政7
(94)		(114)		(118)	
	文政2		文政7		文政12
(106)		(115)		(120)	
	文政2		文政7		文政7
(110)		(116)		(123)	
	文政7		文政7		文政9
(113)		(117)		(128)	

寄贈「更紗裂」	輸入年	寄贈「更紗裂」	輸入年	寄贈「更紗裂」	輸入年
	文政9 文政12 天保2		文政9		文政7
(142)		(349)		(365)	
	文政4 文政7 文政9		文政7		文政7
(345)		(362)		(366)	
	文政9		文政7		文政6
(346)		(363)		(148)	
	文政9		文政7		文政7 天保2
(347)		(364)		(150)	

寄贈「更紗裂」	輸入年	寄贈「更紗裂」	輸入年	寄贈「更紗裂」	輸入年
	文政12		嘉永7		嘉永7
(151)		(163)		(175)	
	文政6 文政9 文政12		文政13 天保2		嘉永7
(154)		(165)		(176)	
	文政6 文政12		文政13 天保2		文政12 文政13
(160)		(166)		(178)	
	文政9 文政12		文政9 文政12		文政12
(161)		(169)		(184)	

寄贈「更紗裂」	輸入年	寄贈「更紗裂」	輸入年	寄贈「更紗裂」	輸入年
	天保3		文政6 文政9 文政12		天保2
(186)		(205)		(371)	
	文政5 文政12		文政13		文政6
(188)		(210)		(372)	
	文政9 文政12		文政9 文政12		嘉永7
(195)		(367)		(373)	
	文政13		文政12		文政6
(199)		(368)		(374)	

寄贈「更紗裂」	輸入年	寄贈「更紗裂」	輸入年	寄贈「更紗裂」	輸入年
	文政6		天保3		天保2 天保3
(378)		(384)		(395)	
	文政13		天保2		文政9 文政12
(380)		(386)		(398)	
	文政6		文政6 文政12		文政6 文政12
(381)		(387)		(399)	
	文政13		文政7 文政12		文政12
(382)		(388)		(401)	

寄贈「更紗裂」	輸入年	寄贈「更紗裂」	輸入年	寄贈「更紗裂」	輸入年
	文政5		文政5		文政5
(405)		(409)		(422)	
	文政5		文政5		文政5
(406)		(413)		(428)	
	文政5		文政5		文政5
(407)		(417)		(431)	
	文政5		文政5		文政5
(408)		(418)		(432)	

註

- (1) 第1章の近世における更紗輸入については、主に拙著『日蘭貿易の史的研究』（吉川弘文館、平成16年）の「第6章 オランダ船の更紗輸入」および、拙稿「日蘭貿易における染織輸入」（フレデリック・クレインズ編『日蘭関係史をよみとく』下巻、臨川書店、平成27年）を参照。
- (2) 喜田川守貞「守貞漫稿」（『類聚近世風俗志』上巻、名著刊行会、昭和54年）423頁参照。
- (3) ヨーロッパ更紗はすでに18世紀後半に輸入されたとする報告があるが（小笠原小枝「更紗」『世界大百科事典』第11巻、平凡社、昭和63年、375頁）、これはオランダ東インド会社の会計に属する本方荷物以外、例えば脇荷物（私貿易品）などとして輸入されたことが考えられる。
- (4) 山脇悌二郎『事典 絹と木綿の江戸時代』（吉川弘文館、平成14年）144頁参照。
- (5) Frieda Sorber, *Vlaanderen-Nederland: Een wisselwerking in katoendruk. "Katoendruk in Nederland"* Den Haag, 1989. p.43. また、オランダ船が持ち渡ったヨーロッパ製の更紗は、オランダ以外にイギリス・ドイツ・フランス等で生産された可能性がある（Ebeltje Hartkamp-Jonxis, *Sits en Katoendruk, handel en fabricage in Nederland. "Sits, Oost-West Relaties in Textiel"* Den Haag, 1987. pp.36-38.）。
- (6) 岩本裕『インド史』（修道社、昭和31年）156～159頁参照。西村孝夫『インド木綿工業史』（未来社、昭和41年）136頁参照。浅田實『東インド会社』（講談社、平成元年）200～201頁参照。
- (7) 前掲拙著『日蘭貿易の史的研究』110頁参照。
- (8) 「九博本」13冊の内、表紙がある10冊には「芦塚」と記されている。これは、「切本帳」作成者の名前であり、これらの「切本帳」が反物目利の芦塚家に伝わったものと考えられる。芦塚家は長崎地役人として反物目利が始まった寛文11年（1671）に任命されており、反物目利仲間の中でも由緒ある家柄である。なお、九州国立博物館所蔵の「切本帳」13冊の調査にあたっては、同館企画課特別展室主任研究員の原田あゆみ氏にお世話頂きました。記して謝意を表します。
- (9) 『阿蘭陀更紗木版画全集』（集品堂、昭和5年）（鶴見大学所蔵）。
- (10) 『阿蘭陀更紗木版画全集』にある各木版画のシートには寛政時代、享和時代、文化時代、文政時代、天保時代と年代が記されているが、現物との照合によって必ずしもその通りではないことを付言しておく。
- (11) 後掲するように（図23参照）、図11は文政12年にも輸入例を確認できる。
- (12) 東京国立博物館所蔵の「切本帳」については、小笠原小枝・石田千尋「紅毛船・唐船・琉球産物 端物切本帳について」（『MUSEUM』456、平成元年）参照。なお、今回、寄贈「更紗裂」と照合をおこなった東京国立博物館所蔵の「切本帳」は以下の19冊である。（図23では年号のみ記した）
 - 「享和二年 紅毛船持渡端物切本 全」

- 「文化貳 丑歳紅毛船持渡端物切本」
 - 「文化十一 戌歳紅毛船持渡端物切本」
 - 「文化十一年 當戌歳紅毛船持渡端物切本」
 - 「文政貳年 卯歳紅毛船持渡端物切本」
 - 「文政三年 辰紅毛船持渡端物切本帳」
 - 「文政四年 巳紅毛船持渡反物切本帳」
 - 「文政五年 午紅毛船持渡反物切本帳」
 - 「文政六年 未紅毛船持渡端物切本帳」
 - 「文政七 申年紅毛船持渡反物切本帳」
 - 「文政九年 戌紅毛船持渡反物切本帳 控」
 - 「〔文政九年 紅毛船持渡反物切本帳〕」
 - 「文政十二年 丑紅毛船持渡反物切本帳」
 - 「天保元年〔文政十三年〕 寅紅毛船」
 - 「天保貳年 卯紅毛船持渡奥嶋更紗類切本」
 - 「天保三年 辰紅毛船持渡端物切本帳」
 - 「天保三年 辰紅毛船持渡端物切本帳」
 - 「嘉永七年 寅紅毛船持渡端物切本帳 控」
 - 「安政四年 巳紅毛船脇荷物切本帳 控」
- なお、東京国立博物館所蔵「切本帳」は、九州国立博物館所蔵「切本帳」と同様、反物目利の芦塚家に伝わったものと考えられる（前掲「紅毛船・唐船・琉球産物 端物切本帳について」5頁参照）。

[付記 1]

本稿において紹介した「更紗裂」432枚を御寄贈頂いた「古裂ギャラリーおおたに」の大谷美智子氏に御礼申し上げます。また、今回の寄贈に関しては、福岡市美術館学芸員の岩永悦子氏に数々お世話頂きました。併せて御礼申し上げます。

本稿作成にあたっては、日本女子大学名誉教授の小笠原小枝先生に御教示賜りました。また、史料整理には、鶴見大学実習助手戸田さゆり氏に協力頂きました。記して謝意を表します。

[付記 2]

本稿は、[JSPS科研費26370803](#)の助成を受けたものです。